学 位 論 文 内 容 の 要 旨

		要　　旨
学位申請者	下村　道子 【比較社会文化学専攻　平成２１年度生】	ニコラス・ヒリヤードは 16 世紀のイギリスの宮廷細密肖像画家である。細密肖像画は、中世の彩飾写本の技術による小型肖像画であり、16～17 世紀にはリムニングと称された。ヒリヤードの細密肖像画は、エナメルや宝石で装飾された金細工に納められ、忠誠、友情、愛の証として身に付けられ、エリザベス女王の宮廷で一世を風靡した。ヒリヤードは金細工師としても活躍し、1600 年頃『リムニング技術論』を著した。彼はそのなかで、約三分の一にわたって宝石論を展開しているが、これまでにこれが十分に検討されたことはなかった。 本論文は、『リムニング技術論』の宝石論に着目し、これを分析することによって新たな評価を与え、ヒリヤードの細密肖像画の流行の要因を探るものである。第 1 章では写本から細密肖像画が成立する過程を考察し、ヒリヤードの作品と作風を概観した。第 2 章ではこれまでの評価と『リムニング技術論』のテクストを検討した。第 3 章では宝石論を古代以来の宝石についての著作と比較し、その特徴を明らかにした。他の著作は、伝統的に宝石の神秘的な力や効能や迷信を列挙するが、ヒリヤードは一切言及せず、宝石の価値は色と輝きの美しさにあるという主張を貫き、自己の体験と観察を解説した。現代の宝石の価値観の誕生を見ることができ、ヒリヤードの宝石論の近代性が明らかとなった。第 4 章では、宝石論が描法にどのように表れているかを検討した。彼は、細密肖像画はほかの絵画と違い特別で、最も高貴な絵画であり、金細工に近似した絵画であると考えた。それ故、技法も素材も共通するものと考え、金細工の技法と知識を駆使し、独自の描法を拓いた。その技法は『リムニング技術論』では、曖昧に記述されているが、次世代の画家たちによって詳細が明らかにされた。 ヒリヤードの作品の人気の要因は、一つには彼に独自の技法にあった。『リムニング技術論』は細密肖像画という特別な用途を持つ肖像画の技術指南書として、また後世代に続く数多くの指南書の先駆として評価される。宝石論は現代の宝石の価値観にも通ずる彼の主張と緻密な観察に基づく、近代的な宝石論として高く評価することができるものである。
論 文 題 目	ニコラス・ヒリヤード『リムニング技術論』の研究	
審 査 委 員	（主査）　教　授　　徳　井　淑　子	
	教　授　　新　井　由紀夫	
	教　授　　松　崎　　毅	
	准教授　　鈴　木　禎　宏	
	跡見学園女子大学　教授　吉　澤　京　子	